

一九四一年四月から一九四四年八月にかけて、モリス・ブランシヨは『ジュルナル・デ・デバ』紙に一七三の文芸批評記事を発表した。一七八九年に生まれたこの著名な日刊紙は、一九四〇年六月一五日からクレルモン＝フェランに撤退し、以来ヴィシー政権の財政援助を受け、ブランシヨの最後の記事の翌日、一九四四年八月一八日に廃刊されることになっていた。ブランシヨは同紙で、限定的ながらも比類のない発言の自由を知ったようである。

いくつかの例外を除けば、これらの記事は週に一度、「知的生活時評」という欄に掲載されていた。一九四三年一月、デイオニス・マスコロの主導で、その選集が『踏みはずし』という表題でガリマール社から刊行された。そこには『ジュルナル・デ・デバ』紙から五五の記事が、大部分は完全な形で、ブ

ランシヨの手直しを経て収録されていた。

一九九九年、ファラゴ社は『ジュルナル・デ・デバ』紙からミシヨールについての三つの記事を集めて刊行した。表題は当時ブランシヨが付けたもので、『アンリ・ミシヨールあるいは閉塞の拒否』と題されていた。二〇〇三年、ブランシヨの死後、同出版社は彼に捧げられたシンボジウムの記録集『モリス・ブランシヨ、批評的物語』の巻頭に、『ジュルナル・デ・デバ』紙からまた別の三つの記事を収録した。

ここに刊行するのは、一九四一年から一九四四年にかけてモリス・ブランシヨが『ジュルナル・デ・デバ』紙に発表した文芸批評記事のうち、『踏みはずし』に収録されていないものである。

二〇〇三年に亡くなったブランシヨは、これらの記事を見直

しておらず、私たちの元に草稿はない。私たちは、『ジュルナル・デ・デバ』紙の記事を、ごく些細な点についてではあるが、自ら修正せざるをえなかった。『ジュルナル・デ・デバ』紙の記事は、日刊紙の刊行に必要な速度で、また、戦時による困難のなかで入稿された。それゆえ、私たちは、ごく明らかな誤植（語彙、一致、句読法）は訂正している。いくつかの、より曖昧なものも、もしかすると著者の意図であるかもしれないので、そのままにしてある。

作家たちの姓の後に付された「氏」、「夫人」、「嬢」といった

語は省略し、提示の仕方を現代風に改めている。モーリス・ブランシヨ自身がそのような削除を求めていたのである。

貴重な手助けをしてくれたモニク・アンテルム、ジョナタン・ドウジュネーヴ、レスリー・ヒル、マイク・ホランド、フアビアナ・デ・モラエスに心から感謝している。パスカル・ドゥバイイ、レジス・サラド、ピエール・ヴィラールにも感謝を捧げる。

クリストフ・ビダン

目次

編者はしがき 7

一九四一年

知的生活時評 15
作家たちの沈黙 18
知的生活時評 21
レーモン・デュメー著『草原に草は生える』、CIFF・ランド
リ著『生け垣』 25
フランスと現代文明 28
モンテスキューの技術 32

伝統の探求 36
小説と詩 39
文化と文明 43
レトリックへの賛辞 48
デカルトへの眼差し 49
モーリヤックの小説 53
若き小説家たち 58
演劇と観客 61
地中海の靈感 65
知られていない、あるいは認められていない作家たち 69
文学における恐怖政治 74
作家と読者 78
J・K・ユイスマンスの秘密 82

急ぐ男 86
ソルボンヌの小説 90
小説についての逆説 93

一九四二年

中世から象徴主義へ 99
コレットの小説 103
ベルクソンと象徴主義 108
小説と物語^{コント} 110
サント＝ブーヴの政治 114
子ども時代の物語^シ 119
ジャン・ジオノの運命 123
ダンテの啓示 128
三つの小説 132
『危険な関係』のあとで 136
デュランティの不幸^{レアリスム} 141
写実主義の好機^{シヤンヌ} 145
ユピテル、マルス、クイリヌス 150
魔術の国にて 154
幽霊の話 159
モンテルランを正しく使うために 164
英雄についての考察 169

「ロマン主義のもっとも美しい本」
あの地獄のような出来事 179
精神の夜警 184
火、水、そして夢 189
モーパッサンの思い出 194
ロマン主義の知られざる者たち 200
レオン＝ポール・ファルグの『隠れ家』
詩作品 210
ポール・ヴァレリーの『邪念』 214
いくつかの新しい長篇小説^コ 219
テーヌからペスキドゥー氏へ 223

205

一九四三年

ニコラウス・クザーヌス 231
ラ・ファイエット夫人の『書簡集』 236
書物 242
戦争の小説と戦争の物語^{レシ} 246
シャルル＝ルイ・フィリップ 251
郷土小説 256
トクヴィルの『回想録』 261
象徴主義と今日の詩人たち 265
モンテルランの戯曲について 271

マリー・ドルヴァルとヴィニーのロマンス	275
いくつかの小説	280
マキャヴェリ	284
雄弁術と文学	289
ジュアンドーの作品について	293
一冊の小説のなかの一三の形式	295
称賛から主権へ	299
宗教詩	304
いくつかの小説	310
フランス組曲	314
ホフマンの幻想作品	319
『ロランの歌』について	323
キエルケゴールと美的なもの	328
短篇小説の技法	333
ラブレールの宗教	338
今日の女性小説家たち	343
モンテスキューの旅	347
フランス文学の歴史	352
アメリカ小説からの影響	357
アンゲルス・シレジウスの神秘思想	361
自伝的物語	366
歴史と傑作	371
『黙示録』についての一研究	375
『寓話』なしのラ・フォンテーヌ	380

ドルバック男爵	385
純粹小説	390
影の嘆き	395
眼差しの小説	398
伝統とシュレアリズム	406
崩壊していく世界で	403
一九四四年	
批評の神秘	411
水源への巡礼	414
小説を次々に	417
四つの福音書	419
ジャン＝パウルからジロドゥへ	422
逸話なき日記	425
言語をめぐって	428
アイセのロマンス	430
物語ることの幸福	433
法を超えた偶像たち	436
アンドレ・ドートルの芸術	439
バルザックの仕事	442
暗黒小説	445
夢の秘密	447

ジャリの小説	450
短篇と物語	454
シャトーブリアンの秘密	456
幻想小説	460
空と夢	462
ジョイスの最初の小説	465
秘めた様子	468
文学上の〈私〉	470
シャルル・クロ	474
ローマの誕生	477
ウイリアム・ブレイク	480
さまざまな死に方	483
ポール・クローデルの選集	486
いくつかの物語	489

レオン・ブロワ	493
いくつかの詩	496
誠実さへの配慮	501
誰でもない者の息子	505
アンリ・ミシヨールの魔術的経験	507
編者註	511
訳註	521
人名索引	551
訳者あとがき	565

一九四一年

知的生活時評⁽¹⁾

おのれを揺り動かす感情を表現できずに、傷を受けた人々は、読書のうちに身を投げ出す。彼らは、書物、それも、難解な書物のなかに、自分たちがどのような存在であるかの説明を、ことさらに探し求める。考えたこともなかった問題に情熱を傾ける。自分たちの時代の卑小さに思いを巡らせ、そうしてそれを測定し、できる仕方自分たちの知的名譽を守る。このような姿勢には、気晴らしへの欲求以上に、絶望した傲慢さがある。人間の現実を、消えゆかない証言のなかで考察しながら、移り変わりによる持統を廃することが目指されているのである。

異論の余地がないのは、パリとその近郊で、知ることへの奇妙な熱狂のために、好ましい条件ではなかったにもかかわらず、知的復興の兆しが生じたことである。読書の愛好家たちは無数

であるように思われた。講演の聴衆は要求が多く、毎度毎度やってくる。何かを読み、学び、知りたいという欲求を、誰もがおのれのうちに見出した。たとえ、あまりにもかまびすしい世間に沈黙を課すための唯一の手段が、自分たちの時代のもっとも近くで発せられたいくばくかの内面の声を聞くことだったということなのにせよ。観念的な見世物への関心は、いかんともしがたい物質的な気がかりによって、いささかも妨げられることはなかった。反対に、外界の困難と、内面の天啓とが、ある深遠な働きによって、魂を操作するのにひとしく寄与したのである。

出版社はしたがって、現今の状況において、まったくもって突飛な数の需要を享受している。その反応はどれも同じである。「私たちは、専門書も小説も、辞書も純粹な思想的試論^{エッセイ}も同じ

ように売っている。望むだけの量を出版できないような本があるだろうか。今日の読者は、何でも読むのだ」。これが意味するのは、読者が実際、何にでも興味があるということだが、それはまた、読者が何でも受け入れるということでもある。この無秩序は、ある程度は自然なものだ。自分が突き返すものしかよく知らない人々に、自分が好きなものにも同じように強い確信を持つよう求めることはできない。彼らは、望まないものについては非常に厳しいが、それ以外のものに対しては甘い。ある種の価値やある種の人間たちと縁を切らせるものに関してはあるらんかぎり純粋だが、自分の交際が及ぶなかでは不純に溢れたままなのである。

このような需要に応えるために、パリの出版社は何をしただろうか。多くの賞賛に値する、つまるところ、たいそう注目すべき努力を行ったのである。克服すべき困難は、大きなものだった。出版社には紙がなく、著者もいかなかった。出版すべきものは何もなく、何も出版できなかった。要するに、出版社には読者しかいなかったのだ。それだけで十分だった。出版社は技術的な困難を乗り越えた。何人かの作家たちに、書こうという欲求を目覚めさせた。出版社はある種の自由を手に入れさせた。というのも、周知のように、書物はあらかじめの検査を受けなくてよい、ただひとつの知的商品だからである。これらを手段として、出版社はひとつのプログラムを作り上げたのである、その実現はまだ始まったばかりだが、真に興味深いいくつかの著作をすでに世に出しているのである。

これらの著作のうちのいくつかは、じっくり検討されるのがふさわしいように思われる。なぜなら、それらはそれら自身のうちに自らの価値を持ち、私たちが生きている時代について、信頼のおける証言を提供しているからである。だが、まずは簡単に、冬季と春季の出版物がどのようなものだったかを思い起こしておくのが有益だろう。時事問題についての本は、数が一番多かったわけでもないし、最も読まれたわけでもない。出来事は出来事である。それを耐え忍ぶ人間は、それを知っているし、沈黙を何よりも好むのだ。とはいえ、何冊かの戦争記がすでにある。うら若き作家ジャン・ド・パロンセリ〔一九二四〕は、この主題について、『二六人の男たち』(グラッセ社〔一九四一〕)という本を上梓したところだが、その優れた性質は共感を呼び起こす。「ジャック・ブノワ・ワッセマン」〔一九〇三〕は、『四〇年の収穫』(アルバン・ミシエル社〔一九四二〕)というタイトルで、もう一冊の戦争記を出版したが、これはすでに有名である。モリス・ベッツ〔一九四六〕による『捕虜たちの対話』(エミール・ポール社〔一九四〇〕)も同様に関心を集めた。これらの著作は、ピエール・マッコルラン〔一九七二〕の『ある世界の終焉の年代記』(エミール・ポール社〔一九四〇〕)や、ジャック・シャルドンヌ〔一九六八〕の『一九四〇年の私的年代記』(ストック社〔一九四二〕)と同じく、私たちの時代にあまりにも近すぎ、その謎に関与せずにはいない。それらは自らの暗闇を抱えていて、探ってみても無駄に終わるほかにない。

小説は、おのれに割り当てられたと覺しい運命を体感した。

ひとは、小説を書くことを要求していたのだが、それ以上に、小説を読むことに情熱を注ぎ込んだのだ。出来が良く、きちんと構成された本は、凡庸な伝統へのある種の忠実さを示すものでしかない。若い女性作家イレヌ・フランセ〔生没年不詳〕の最初の小説『私は少女だった』〔ドゥノエル社 一九四二〕には過剰な賞賛が与えられたが、その魅力は土台を欠いていて、心地よい安易さと計画のない無秩序とがひとの気に入ったのだ。技巧のなさが、自然さをいつも意味するわけではないのである。

逆に、たいへん若い作家の第一作である、『レーモン・デュメー〔一九一九〕』の『草原に草は生える』〔ガリマール社 一九四一〕には、もう一度見直すべき優れた性質がある。この作品は均衡が破れる点まで辿り着いておらず、作者にはそれができたように思われるのだが、にもかかわらず、純粹さがあり、そのために、くだけていると同時に堂々としたものになっている。それは読者に呼びかけ、率直に読者を読者自身から切り離す。それは穏やかであり、確固としている。もう一人の若い作家、シャルル・フランソワ・ランドリ〔一九〇九―一九七三〕の小説『生け垣』〔コレア社 一九四一〕。初版はスイス・ローザンヌのルキキ〔ルド・デュ・リール社より一九三九に行〕にも言及しておこう。この小説は、束の間の欠点によつてのみ、ジャン・ジオノ〔一九〇五〕の著作を思わせる。

人々の注意を最も引きつけた作品は、知的かつ文学的な批評作品である。アンリ・モンドール〔一九六二〕がステファヌ・マラルメ〔一八九二〕について書いた新作『マラルメの生涯』

（ガリマール社 一九四二）のことは、いくら考えても考えすぎだとは言えまい。それは、長きにわたる仕事の結実であり、見事な仕事である。アンリ・モンドール医師は、並外れた光での知性の王の運命を照らし出す、素晴らしいテクストの数々を集成した。膨大な数の書簡を忍耐強く渉獵することで、誰よりも沈黙し、誰よりも虚飾を廃し、知的な慎みに誰よりも似つかわしいこの作家の言葉を引き出し、さらには、打ち明け話をも引き出すことに成功したのである。彼は、実存のすべてが作品のなかにあり、作品自体、その驚異そのものによつて虚無とまったく近しくなっていた、そうしたひとりの男に属する歴史を復元した。彼は、単純に誇り高いこの男の姿を示し出した。表現の絶対的な力を純粹に行使することで、完全かつ難解な孤独のうちに世界を支配する術を心得ていた一人の男に、まじまじと視線を投げかけることは、まさしく、今日の精神にとつて、簡単だが心地のよい復讐である。

これほど重要なこの著作のあとでさえ、研究と注目に値する数多くの新しい著作が世に出ることとなる。マルセル・アルラン〔一九八九〕が選定と注釈を手掛けた『フランス詩選集』〔ストック社 一九四一〕は、ティエリー・モーニエ〔一九〇九〕の同じジャンルの著作〔リマール社 一九三九〕をいみじくも思い起こさせるが、後者の成功がかなされることはないだろう。ベルナル・グラッセ〔一九五五〕が集録・公開した、『シャルル・ルイ・ド・ゴンダ・ド・モンテスキュー〔一七五九〕』の『手記』の出版〔グラッセ社、一九四一〕は画期的な出来事であり、時況

のためにほとんど忘れたいものとなるだろう。この本は、目に見える精神の自由によって、夢を見させてくれるのだが、そういうした自由の過剰は、偽善への挑戦であるかのようだ。簡単な何かと堅苦しい何か、凝った何かと自然な何か、これらの悪魔的なページのなかで煌めくのだが、知性はそこで、おのれの力の自在さによって、野蠻を挑発しているかに見える。最後に、ダニエル・アレヴィ〔一九七三〕による注目すべき「シャルル・ペギー〔一九七三〕」の伝記（『ペギーと半月手帖』、グラッセ社〔一九四一〕）に加え、ふたつの最重要な翻訳作品を挙げておこう。ニーチェの『悲劇の誕生〔四〕」〔一九四〇〕と、キェルケゴールの『哲学的断片への追伸〔五〕」〔一九四一〕であり、二冊ともガリマール社のものだ。

このような性急な紹介では、かくも奇妙なこの数カ月のあいだの、精神の真の運動は知られないままである。この運動を、その移ろいやすさとともに、その矛盾のうちで捉えようとしてみる必要があるだろう。事実なのは、多くの作家たちが沈黙を強いられたが、それは彼らが遭遇した外的な困難によるというよりもむしろ、不毛さの真の試練のゆえだということである。彼らは沈黙したのであり、沈黙を続けるのだが、それは、もはや言うべきことが何も無いように思われるからなのだ。乾き果てた夜の帳が、彼らのうえに落ちた。空しく動き回る数々の年月を経て、彼らについては、おのれ自身の沈黙を耳にしたのだ。この危機はどれだけ続くだろう。文学と「芸術」は今日、数多くの当を得ない問題、いくつもの不安をもたらす疑念、ある悲

しき痛悔によって、動揺させられている。倫理と良識がおおいに問題となっている。これらのたいそうな名詞は、伝統と古典的風格を気にかけるのだが、概して、凡庸さと無力に華を添える役回りである。それらに身を飾る面々は、それらに値しない者たちだ。その他の者たち、真の古典主義者たち、真の伝統作家たちは、良識の極限を大胆さの極みに探し求め、おのれ自身の独自性を意のままにすることしか欲しない。

作家たちの沈黙

私たちがぐり抜けてきたばかりの数カ月のあいだにいくばくかの作家たちが抱え込んでいた不信をはっきりと示すことは、間違いない非常に難しい。なぜ、種々の知識人たちはすべてを諦めたのだろうか。知性を働かせることさえも。どのような思索、あるいは、どのような思索の不在ゆえに、彼らは、出版すること、書くこと、熟考することが容赦なく禁止される背徳行為だと思えるような、こうした不毛な試練に陥つたのだろうか。どのようにして、彼らについては、この奇妙な休息に、彼ら自身にとつて謎であり、地獄でもあるこの休息にたどり着いたのだろうか。こういった精神状況の原因を探し求めても、今ではかぎりなく無駄でしかありえない。すべてに説明を付ける、あまりにも明白な理由が思考の俎上に載せられる。戦争に引き続く敗戦と、敗戦に引き続く戦争という、あらゆる主体に否応のない反応をもたらすこれらの圧倒的な理由に異を唱えて、何